

# 金齒

小川未明

青空文庫



「絵を描きたくたって、絵の具がないんだからな。」

あまり欠乏しているのが、なんだか自分ながら、滑稽に感じたので、令二は笑いました。

「いくらあつたら、その絵の具が買えます。」

「さあ、ホワイトはなかった、それにグリーンもないと、まあ三円はいりますね。」

「もし、それくらいでいいのなら、私が、どうかして、こしらえてあげますよ。」

母親は、年のせいか、日の光が恋しいので、縁側の方に、  
小さな背中を向けて、答えました。

「なに、ますます描かなくなつていいんです。」  
令二は、気の弱い母をいじめて、すまなかつたと、淋しい気が  
しました。

そばで、一心にセーターを編んでいた、姉のさき子は、  
「そんなこと口に出さなければ、いいじゃないか。」と、弟を上  
目でにらみました。

「描きたいから、描きたいといったのだ。」  
こんどは弟が、口をとがらして姉をにらんだ。  
「なんだ、そのかばのような顔は？」

「なんだ、乾ほしいわしのよ様な目めをして。」

二人ふたりが、言い争あらうと、母ははは、

「もう、けんかはよしておくれ、明日あすにでもお金かねをこしらえてきて絵えの具ぐを買かつてあげますから。」といいました。

「お母かあさん、令二れいじにそんなお金かねをおやりなさるなら、私わたしにも毛糸けいとを買かつてちょうだいよ。」

「おまえたちは、お母かあさんに、どうしてそんなお金かねがあると思おもえるの。」

「お母かあさん、僕ぼくはいりませんよ。なに、デッサンさえ、やっていれば、金かねなんか、かかりませんから。」

「私わたし、とれた金歯きんばを売うつてこようかと思おもっているのです。新聞しんぶん

の広告こうこくを見ると、金きんならなんでも高く買かうと書かいてありますから。」

これを聞きくと、二人ふたりは、さすがにひどく打うたれたように顔かおを見合あつたが、さき子こは、そのまま下したを向むいて、編あみ物の棒ぼうを動うごかしていました。独ひとり、令れいじ二にが、

「お母かあさん、そんなことをせんで、齒はいしや医者へいって、とれたのをつけてもらっていらつしやいよ。」といいました。

「いえ、私わたしは、このあいだから、そう思おもっていたのです。それに、あれのないほうがかえって、ものが食たべいのですよ。ただ売うることなどしつけないのに、どんな店みせがいいだろうか、正しょうじき直ちきなところへいきたいと思おもっていたのです。そして、あれを売うつたら、

なにかおまえたちの喜びよろこぶようなものを買かつてあげようと、独ひとりで  
 樂たのしみにしていました。」

このごろは、まったく砂漠さばくのように、灰色はいいろにししか目めに映うつらな  
 い家いえの中なかにも、小ちいさいながらさんらんとした、金きんの塊かたまりが、隠かくされ  
 ているということとは、令二れいじにとつて、不思議ふしぎというよりか、むし  
 ろ、人生じんせいには、つねにこうした矛盾むじゆんがあつて、樂たのしいのだと  
 いう感じかんのほうを強つよからしめたのであるが、これが母ははの大事だいじな齒は  
 であるだけに、あまり朗ほがらかな氣持きもちちにはなれなかつたのです。  
 「齒はのないのが、かえつてかみいいなんて、そういうことはあり  
 ませんよ。」

母ははの道理どうりに合あわなことばい言葉を、令二れいじは、指して摘きしました。

「いえ、おかしな話はなしだが、あまり金きんをば惜おしげなく使つかっているの  
で、重おもくて大おおきすぎるのです。」

「どうして、またそんなにたくさん金きんを使つかったのだらうな。」

「まだ、金きんの値ねが上あがらなかつたときで、それに造つくった齒はい医い者しゃが、  
学が校っこうを出でたばかりで細さい工いくがうまくなかつたのですね。」

「そんなことが、いまの私わたしの家うちのしあわせになるんですかねえ。」

「しあわせって、なんだ？」

このとき、姉あねは、また弟おとうとをにらみました。しかし、令れい二じは相あ手いて  
にしなかつた。

「お母かあさんは、長ながい間あいだ、そんなものを入いれて、不ふ自じ由ゆうを我が慢まんして  
いたんですか。」

「歯はを入れた、はじめのうちには、みんなこうしたもので、なれれば具合ぐあいがよくなると思おもっていたのです。そのうちに、不自由ふじゆうになれてしまつて、つい不自由ふじゆうということがわからなくなつたのです。こんど、とれてから、はじめて、堅かたいものでもほかの歯はでかめるので、入れ歯いばの不ふできであつたことがわかつたのでした。」

「じゃ、なければないで、自然しぜんがいちばんいいということになりますね。それなら、その金歯きんばを売うつちまいましょう。」と、令れい二じは、いいました。

「ばか、おまえは、お母かあさんから、そのお金かねをもらう気きなの？」と、姉あねは、弟おとうの方ほうへ体からだをゆすりました。

「ああ、くださればもらうよ。」

「さつき、デッサンだけでいいといたたじやないか。」

「たまには、色のついていいる風景も描きたいんだ。」

「おまえの絵が、なにになるといいうのだ。」

「そういう姉さんはなにになるのか？」

「私は、さつきと街へ出て働くわよ。そして、おまえの絵は、お

金になるの。」

「美しいということが、わからない人間ではしかたがないのだ

。」

母親は、子供たちの話をば、じつとして、よく聞いていると

も、また、よく聞いていないとも、どちらにもとられそうなよう

すで、だまっています。

「ねえ、お母さん、なぜ令二を芸術家なんかにしたんです？」

「せいた調子で、さき子は、おびやかすように、問いかけると、母は、

「その責任なら、死なれたお父さんにあるのだよ、家のことは、

なんでもお父さんの意見できめたのだからね。ある日、お湯屋で、

三助が、青い顔の坊ちゃんだが、どこかわるくはないんですか、

子供のうちは、勉強などよりも体がいちばん大事ですぞとい

った、言葉にたいそう感心なさつて、学校をやめさせてしま

いなされたのだよ。」

「お父さんの罪だわ。」と、さき子がいいました。

「お父さんの悪口なんかいったら、僕は、承知しない。もし、

学校がっこうへ行って、試験しけん勉強べんきょうばかりしていたら、僕ぼくは、ほんとうの自然しぜんというものを、永えい久きゅうにわからずにしまつたらうな。」

「ふん、おまえは、わかつているのか？」

「わからなくて、絵えが描かけるか。」

さき子こは、たちまち、しんみりとした調子ちようしになって、

「令ちゃんれいは、これから先さき、どうして食くつていくつもり。」と、ききました。

「絵えを描かいてさ、それよりほかに道みちがないだろう。」

令二れいじは、さびしい笑わらいを顔かおに浮うかべた。そして、なにか、遠とおくのものかんがを考かんがえるような、目めつきをしました。

「令ちゃんれい、芸術家げいじゆつかで、食くつていかれる？」

「人をばかにするな。」

「心配だから、聞くんだわ。」

令二は、怒った感情をあらわすときは、いつも、口をとがらすのでした。

「人間が、まったく美を愛しなくなったら、その国は滅びてしまうだろう。人間に美を愛する本能がなかったら、芸術というものは、はじめから存在しないのだから。」

このとき、母親は立つて、たんすの小ひきだしから、紙に包んでしまっておいた、金歯を持ってきました。

「これは、金の無垢だよ。これを見て思い出したが、お父さんが、夜おそく帰ってらして、歯医者さんの家の前をお通りになると、往

来うらいに面めんした窓まどに、あかりがついていて、コツ、コツと金かなづちを  
 つかつている、小ちいさな音おとがきこえたので、おまえの齒はは、明日あすは  
 いるそうだが、いま造つくっているのが、それだなと、音おとを聞ききなが  
 ら、歩あるいてきたとおつしやつたのを覚おぼえている。ちようど秋あきの末すえ  
 のことで、翌よくちよう朝あさ、齒は医者いしやへいくとき、寺てらの前まえを通とおつて、黄きいろ色  
 な、いちようの落おち葉はがたくさん敷しきいし石いしの上うえにたまっているのを  
 見みました。「  
 さき子こと令れいじ二には、母ははの話はなしよりは、金きんば齒ばのほうに多おほく氣きを取とられ  
 ていたらしかつたのです。  
 「なるほど、重おもみがありますね、これは、一もんぬか下かということは  
 ありません。」

「いくらになるでしょう。」と、さき子もこれを掌てのひらの上に載のせて、  
心こころのうちで重おもさをはかりながら、そんなことを思おもっていたが、ま  
た、これが、ある時代じだいのお母かあさんの齒はであつたかと、おのずと涙なみだ  
が目めの中なかにわいてきました。

「お母かあさん、これをお売うりになつたら、いいげたをお買かいなさる  
といいわ。」

「いいえ、私わたしは、いま、べつになにも欲ほしくないけれど。」

「お母かあさん、新聞しんぶんに出でている相場そうばは、純じゆん金きんをばいひうのでし  
よう、それだけでなくも、持もつていけば、きつと安やすいことをいま  
すよ。」と、令れい二じが、いいました。

「まあ、そんなことだろうね。」

さき子は、慨然として、

「ああ、お母さんは気の毒だ。私、早く口を見つけて働くわ。令二には、ちつともそんな気がないのだから、にくらしい！」

「そんなことをいうもんじゃありません。令二だって、考えますよ。」

「おまえ、考えているのか？」

「僕は、絵かきだから、美しい絵を描くことしか考えていない。」

それが、いちばん正しく、また生きる道だと思つている。それよりほかのことは僕にはわからない。」

「ああ、どうしたら、そんなことがいえるだろう。私もそんな美しい夢が欲しいわ。お米がなくなってもかまわない、自分かつて

な氣持ちになりたいたいものだ。」

日が傾くと、外よりは、家の内から、だんだん肌寒くなりました。母親とさき子は、いつしか茶の間を去って、夕飯の支度にかかり、令二だけが、まだ縁側に残っていました。

二

「令ちゃん、お母さんに心配かけちゃ、だめよ、すこし感心なさるようになしてあげなくちゃ。」

「姉さんは僕の顔を見ると、すぐいじめるのだな。僕にだつて、すこしは認めてくれていい素質があるのだぜ。」

「このあいだ、東京駅へ叔母さんを見送りにいったとき、どうしたの？ 聡さんがあいさつなさるのに、帽子も脱らずに頭を下げたって、お母さんは、顔を赤くしたと、おっしゃってよ。」

「ちよつと、だれだかわからなかったのだ。」

「あまり、非常識だわ。従兄の顔を忘れるなんて、まぬけだわ。」

「セパードみたいな顔つきをしているので、だれかと思つたのさ。」

「聡さんは、来年から大学で、秀才という話じゃないの。」

「学校へ行って、あんまり機械的に訓練されると、人間。」

もセパードみたいな顔つきになるものかしらん。」

「そんなことばかりしか、考えていないのでしよう。お母さんは、どんな学校でもいいから、骨のおれないところへ、おまえを入れておけばよかつたとおっしゃっていらしたわ。しかし、令ちゃんは、詩人よ。詩人は、書物からでなく、自然から学ぶという話よ」

「僕、今度かいている絵は、なかなかいいぜ。」

「そう。」

「原色だけを使って描いてみたが、純粋で、明るい、好きな感じが出せた。」

「令ちゃんは、いったい、単純なものが好きね。」

「ああ、なんでも単純たんじゆんに限るかぎ。単純たんじゆんで、素朴そぼくなもの、清きよらかだ。ちようど、文明人ぶんめいじんより、原始人げんしじんのほうが、誠実せいじつで、感かん覚かく的で、能動のうどう的で、より人間にんげんらしいのと同じだ。近き世んせいになつてから、人間にんげんは墮落だらくした。だんだんほんとうの美びといふものがわからなくなつた。そこへいくと、まだ自然しぜん界かいは、原始時代げんしじだいからのままだ。木きにしろ、草くさにしろ、鳥とりにしろ、虫むしにしろ、本質ほんしつを変かえていない。正しょう直じきで、明めい朗ろうだ。あの澄すみきつた子供こどもの目めのよなものさ。」

二階かいのガラス戸どから、あさぎ色の空いろ そらが、遠とおい記憶きおくのようになぞいていました。晚ばん秋しゆうの日の光ひ ひかりが、桜さくらのこずえに残のこつた、わずかばかりの葉はを透すかして、花はなよりもきれいに見みせています。

子供が、青竹を切つて、造つた管笛を吹くように、パイ、パイ、鳥がなくなつて、広い、隣の庭先を見下ろすと、ひよどりが、青木の枝にきて赤い実を争っているのです。

さき子と、令二は、窓から、頭を出してこれをながめていました。

「思いがけない、いいものを見つけたといつて喜んでるのよ。」

「ほんとうかな。」

「この赤い実を食べてもいいのかといつて、聞いているんだわ。」

「そうかしらん。」

「お天気がいいので、へぼ絵かきが、こつちを見て笑つてるといっているのだわ。」

「ああ、そうだ、それと並ならんで、乾ほしいわしのようなヒステリーの女おんながといつて……。」

令二れいじは、姉あねの頭あたまの髪かみをつかみました。

「お母かあさん、きてくださあい。」という、さげび声ごこえがしたのであります。

## 三

「ねえ、お母かあさんは、令れいちゃんをどうお思おもいなさるの。」

「なぜ、また、そんなことを聞きくのかい。」

「昨日きのうのことよ、どこかの人ひとが、たいへん精せい巧こうな空くう気き銃じゆうを提さ

げて歩いてあいたのですつて。そして、片手かたてにたくさん打うったすず  
 めもぶらさげて。そこへ令れいちゃんとおが通りかかると、ちようど、高たか  
 い木きのこずえに、すずめが二、三羽ばと止とままつてないているのを、そ  
 の男おとこのひとがみつつけて、すぐまにねららつたのですつて。そのとき、令れい  
 ちゃんとおはどうかして、あのすずめが助たすけられないものかと思おもつた  
 から、暗くらくなつて、盲めくら目とりの鳥とりを打うつのは、だれだつてできるなど、  
 そのばの子こ供どもたちにむ向むかつて、大おおきな声こえで、いつたそうです。する  
 と、その男おとこは、ねらいを中ちゆう止しして、そんならら君きみ打うてるかといつ  
 て、令れいちゃんをにらんだそうよ。「  
 母は親おやは、このは話なしに、深ふかい興味きようみをお覚おぼえたらしく、笑わらつて、  
 「それから、どうしたでしよう。」といいました。

「僕は殺生はきらいだ。もし、おじさんが、ほんとうに名  
人なら、このおかめどんぐりを打つてお見せよ。そうしたら、  
僕は、敬服するがなあといつて、令ちゃんは、一人の子供が手  
に持っているどんぐりを一つもらつて、道の遠くへ置いてきたの  
ですつて。」

「まあ、そうして……。」

「すると、その男の人は、どんぐりをねらつて、うまく当てたの  
ですつて、どんぐりが破れて弾丸が、石にあたつて、火が出たそ  
うよ。みんなが、びっくりして声を上げているうちに、すずめは、  
どこかへいつてしまつて、令ちゃんの思うとおりになつたとい  
うのよ。こんな話をきくと、ただばからしいとだけは思えないわ。」

母親ははおやは、火鉢ひばちによりかかるようにして、娘むすめの顔かおを見みました。

「そういうふうには、おまえがあの子こを半分はんぶん疑ぎつてみるのも道理どつりだけれど、ばかというものじゃない、ただ異ちがっているだけだ。あの子こには、学問がくもん、学問がくもんといわぬほうがいいよ。どちらかといええば、私わたしは、学問がくもんより人情にんじようのあるほうを取りとりますからね。先せんだつてであつたか、令二れいじが、お母かあさんには、空そらへ突つき出でている木の枝えだが、金きん色いろには見みえませんか。僕ぼくは、このごろの風景ふうけいが、みんな光ひかつて見みえますがねというから、それは、おまえが、お母かあさんの金歯きんばを売うつたお金かねで、絵えの具ぐを買かつたからでしょうというと、お母かあさんは、さすがに偉えらいな、よく僕ぼくの心こころの底そこの見みえないところまでわかつている。こんど描かいている絵えは、傑けつ作さくと思おもいま

すから、もし評判ひょうばんにでもなつて、いい値ねで売うれたときには、なんでもお母かあさんのお好きすなものを買かつてあげますよというのです。わたし私はなにもほしいとは思おもわないが、ただおまえの絵えが、世よのなか中に認みとめられれば、それで満まんぞく足そくです、なによりもそれがうれし  
いといつたのですよ。」と、母ははおや親わらわは、笑わらいました。

「だつて、お母かあさんは、よく、私わたしみたいな不幸ふこうなものはない、芝し居ばいなんか、もう何なんねん年み見たことがないと、おつしやるじやありませんか？」と、さき子こはいいました。

「つい愚痴ぐちをいってしまつて、後あとから、すまないと氣きがつくのです。わたし私わたしなんかは、どうでも、これから世よの中なかへ出でかけなければならぬ、おまえたちのことを考かんがえると、そんな、もつたいないこと

はいえないのですからね。」

「お母さん、私が、働いてお金が取れるようになったら、きつと、お母さんのすきな、お芝居を見せてあげますわ。」

「ほんとうに、芝居なんか、見たくありません。おまえも、令二も、そうやさしくいってください。それだけで、私は、もう、幸

福なんです。」

母親は、娘がそれを見て、心でお母さんの癖がはじまつたと思つているのも知らずに、火ばしの先で、火鉢の灰の上に、点々をつけていました。

このとき、思い出したように、木枯らしが、叫びを静かな空に上げました。それは、忘れていた令二を、二人の胸の中に、呼び

もどしたのでした。

「令れいちゃんはおそいが、どうしたんでしょう。」と、さき子こが、  
いいました。

「今日きょうは、たぶん描かき上あげるだろうから、おそくなるかもしれな  
いといっていました。」と、母親ははおやは、答こたえたが、鋭すどどいあらしの  
音おとに、耳みみを澄すましていたようです。

そのうちに、くぐり門もんの戸とが開ひらくと、ぼろぐつを、玄関口げんかんぐちの  
敷石しきいしに突つっかけるようにして、引ひきずりながら、勝手かっての方ほうへま  
わった音おとがしました。

「あ、帰かえってきた。」

そういった、母ははの言葉ことばの調子ちようしには、一しゆ種あんどの安堵あんどがあらわれて

いました。さき子は、立って、木枯らしの中を歩いてきた弟を出迎えました。

「外は、寒かったですよ。」

「なんだか、ものすごい空になってきた。」

「令二、絵は描き上がりましたか。」と、母親が、ききました。

「やつと描き上げました。」

「そう、見せてくれない？」と、姉は、両手を差し出して、弟の手から、二枚重ね合わせたカンバスを受け取ろうとした。

「いや、見てはいけない！」

令二は、強く拒否しました。

「私たちにも、よくできているか、そうでないかくらいはわかり

ますよ。だれに見せようと思つて、一所懸命描いたの。見せるための絵なら、真心をもつて、見てわからぬはずはありません。おまえのことをいちばん真剣に考えているのが、私とさき子でないか。」と、母親がいました。

「そうよ、お母さんの金齒まで売つて……。」と、姉がいかけたのを、令二は、怖ろしい顔をして、威嚇しながら、

「だまつておいでよ。」と、押さえつけて、母の方に顔を向けると、訴えるように、

「ねえ、お母さん、僕は、とにかく、新しい色を発見したんです。それがどれほどの貴い性質のものか、いまは自分にもわからないし、あるいは、僕がこの色を出すために生まれてきたよう

なきもするので、すぐに、いいとか、わるいとかきめてしまうことが怖ろしいんです。」

「H先生にも、見せないつもり？」と、さき子がききました。  
「三月までは、僕も見ないから。」

「お母さんは、おまえのいうことを、正直に信じて、楽しみにして待っていますよ。」と、母親がいました。

「毎夜、一人の女を殺した、暴虐なペルシアの王さまに、おもしろい話をしてきかせて、千夜一夜の間、地獄から人命を救ったという、美しい娘の芸術で、将来僕の絵がやりたいものだな。」

令二は、つぶやいて、なにか、深く考え込んでいました。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 二」講談社

1977（昭和52）年9月10日

1983（昭和58）年1月19日第5刷

底本の親本：「未明童話 お話の木」竹村書房

1938（昭和13）年4月

初出：「文芸」

1935（昭和10）年3月

※表題は底本では、「金齒《きんば》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2016年10月28日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 金齒

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>